

# 宮沢賢治 「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」

——賢治が求めた〈異世界〉との交信——

塚本春奈

はじめに

「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」は宮沢賢治の未発表の長編童話である。賢治は数多くの詩や童話を創作しており、特に童話作品については作者が手入れをし改編したものも多い。本論で扱う「ネネムの伝記」も二度改編されている。しかし本作の成立時期については、比較的考察の詳しい最新版全集の校異における記載でもはっきりとはわかっていない。そこで「ネネムの伝記」の成立時期については、池上雄三氏の、

妹の死に端を発して書き出され（これが上限となる）、  
一通りまとまった時期（中限）としては大正一二年八月頃が目安となる。そしてその手入れは大正一三年七月頃まで続いた、すなわち成立時期の下限は『亜細亜

学者の散策』（大13・7・5）までたどることができる。

（池上雄三 「『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』  
—成立年代について—」 『国文学・解釈と鑑賞』第

四九卷一三号 一九八四年一月 至文堂）

とする説に注目する。論者は「ネネムの伝記」の成立に、賢治の妹トシの死が関係すると考えている（後述）ため、今回はトシが亡くなった一九二二（大正一一）年一二月頃に執筆を開始し一九二三（大正一二）年八月頃までに成立したと仮定する。

次に本論では、ばけもの世界の住人が人間世界に姿を現すことを禁じた「出現罪」を主人公ネネムが犯す場面に注目する。まず本作に対する二つの問題提起を行い、その後それぞれの疑問点を考察する。疑問点の一つ目は主人公ネ

ネムが落下した際の状況や動きを踏まえた上での落下の要因について、二つ目は作中の世界設定について考察していく。これによって「ネネムの伝記」に投影された賢治の思いを更に理解することができると思われる。

「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」の本文引用は『新』校本宮澤賢治全集第八巻童話「I」本文篇（一九九五年五月二五日 筑摩書房）に拠り、（一）内の漢数字はページ数を示す。また、考察の際に作品名が長いいため、本論では「ネネムの伝記」と略記する。

### 一、「ネネムの伝記」の問題点

「ネネムの伝記」は、ばけもの世界の住人ペンネンネンネンネン・ネネムが立身出世を成し遂げ、最後は慢心から罪を犯す。物語の最後、ばけもの世界の世界裁判長になったことで物事を己の意のままにできると考えたネネムは、慢心から踊り暴れた際に「どうしたはづみか、足が少し悪い方へそれ」人間世界に踏み込み、結果ばけもの世界で禁じられている「出現罪」を犯してしまう。人間世界に姿を現してしまったネネムは人間の巡礼者に見つかり、彼らの呪文を聞いて気絶する。気が付くとネネムはばけもの世界に戻っており、彼は泣きながら出現罪を犯した自分自身を

裁き、世界裁判長を辞職することで物語は終わる。

#### 一一一、ネネムの〈落下〉について

「ネネムの伝記」は、ネネムが出現罪を犯したことで終わりを迎える。しかし、彼が人間世界に出現し、その後ばけもの世界に戻ってくる場面に不可解な点が存在するのだ。以下が、ネネムが慢心から踊り暴れ出現罪を犯す場面になる。

ネネムは踊ってあばれてどなって笑ってはせまわり  
ました。

その時どうしたはずみか、足が少し悪い方へそれ  
ました。

悪い方といふのはクラレの花の咲いたばけもの世界  
の野原の一寸うしろのあたり、うしろと言ふよりは少  
し前の方でそれは人間の世界なのでした。（三四三頁）

このようにしてネネムは人間世界に出現してしまうのだが、人間世界に落下したとは書かれておらず、彼は〈踏み込む〉という動きで出現したと解釈できる。では、ネネムが人間世界からばけもの世界に戻る時はどうか。その際の描写は以下の通りである。

(巡礼者の呪文を聞いた) ネネムはまるでからだか  
しびれて来ました。そしてだんだん気が遠くなつてと  
うとうとガーンと氣絶してしまひました。

ガーン。

それからしばらくたつてネネムはすぐ耳のところ  
で「裁判長。裁判長。しつかりなさい。裁判長。」といふ  
声を聞きました。おどろいて眼を明いて見るとそこは  
さっきのクラレの野原でした。

三十人の部下たちがまはりに集まつて実に心配さう  
にしてゐます。

「あ、僕はどうしたんだらう。」

「只今空から落ちておいで、ございまして。ご気分は  
いかがですか。」 (三四四頁)

この描写で、ネネムの部下に「只今空から落ちておいで、  
ございまして」と言われることから、ネネムがばけもの世  
界へは〈落下〉して戻つてきたことが読み取れる。

つまり、ばけもの世界から人間世界へは〈踏み込む〉、  
人間世界からばけもの世界へは〈落下〉と、ネネムは世界  
間の往復で異なつた不自然な動きをしているのだ。往復で  
の動きが異なること、特に、人間世界からばけもの世界へ

移動する時に〈落下〉したのはなぜか。これが「ネネムの  
伝記」に対する疑問点の一つ目になる。

#### 一―二、「ネネムの伝記」の特異性

なぜネネムは、ばけもの世界から人間世界へは〈踏み込  
み〉、人間世界からばけもの世界へは〈落下〉するといふ  
異なる動きをしたのか。この考察をするために、まず宮沢  
賢治童話の中から「ネネムの伝記」と同じように落下また  
は反対に上昇の描写がある作品を調べ、以下のような分類  
を行った。今回は「ネネムの伝記」が童話であるため、調  
査対象は賢治の童話作品に限定、考察では他作品への言及  
はしないため、要因と一部代表的な作品のみを表示してい  
る。

I型：落下・上昇に罪、悪事、罪悪感が関わるもの。基本  
的には一つの世界の中に二つの領域(天/地・海)  
があり、その領域の構造は上下関係で成り立ってい  
る。それに伴い、登場人物は住む領域が定められて  
おり、その住む領域によつて、登場人物にも上下(優  
劣)関係がある。作品の登場人物は、罪、悪事、罪  
悪感の関与によつてその領域間を落下・上昇する。

・「双子の星(二)」

・「よだかの星」

Ⅱ型：その落下・上昇が、作品の登場人物にとって恵みや喜びを表すもの。

・「いてふの実」

・「十月の末」

Ⅲ型：演出や場面を転換するための落下・上昇。

・「さるのこしかけ」

・「若い木霊」

では、「ネネムの伝記」に描かれるばけもの世界と人間世界、この二つの世界も上下関係になっているのか。また、ネネムやばけものたちは、人間世界や二世界の関係をどのように認識しているのか。「ネネムの伝記」の本文に注目すると、Ⅰ型作品の特徴である上下関係で成り立つ世界構造とは異なる特徴が明記されていることがわかった。以下は「ネネムの伝記」で二つの世界がどのような関係であるか、読み取れる部分を抜き出したものになる。

（ネネムが部下の検事や判事に裁判の方針について尋ねた際の、部下からの回答）

「はい。裁判の方針はこちらの世界（引用注／ばけもの世界）の人民が向ふの世界（引用注／人間世界）に

なるべく顔を出さぬやうに致したいのでございます。」

（三二九頁）

（ネネムが出現罪を犯す場面）

その時どうしたはづみか、足が少し悪い方へそれました。

悪い方といふのはクラレの花の咲いたばけもの世界の一寸うしろのあたり、うしろと言ふよりは少し前の方で人間の世界なのでした。（三四三頁）

これらの内容から本作では、ばけもの世界と人間世界というそれぞれ独立した二つの世界が存在し、少なくともばけもの世界からは人間世界を明確に認識していることが読み取れる。また、ばけものたちは人間世界を「向ふの世界」や「向ふ側」と認識していることから、この二つの世界関係は上下関係ではなく、隣り合うような並立関係にあると考えられる。これはⅠ型作品の特徴である、世界構造が上下関係で成り立っている点とは異なっている。また、ばけものたちは人間に対して尊敬や軽蔑などの特別な感情を抱いているようには見られず、これもⅠ型作品の特徴と異なると言える。

ここまで、落下・上昇の描写がある宮沢賢治童話の分類を行い、I型作品の特徴と「ネネムの伝記」を比較してきた。そこから本作には、ばけもの世界と人間世界という二つの世界が並立関係で存在すること、ばけもの人間に上下（優劣）関係が見られないことが考えられる。これらの点は落下・上昇の描写がある宮沢賢治童話において、「ネネムの伝記」の特異性であると言えるだろう。同時に、なぜばけもの世界と人間世界は並立関係であるのか、なぜばけもの人間には上下（優劣）関係が見られないのか、という疑問も挙げられる。この点が本論での「ネネムの伝記」に対する疑問点の二つ目になる。

### 一―三、問題提起

ネネムの落下について先行論では、ネネムの落下する場面にのみ注目し「慢心による落下」と考える説が多かった。もちろん、慢心というテーマも無視することはできないが、先行論ではネネムが落下した際の詳しい状況を踏まえたものはほとんどなかった。

本論では、ネネムがばけもの世界と人間世界という並立関係にある二つの世界を〈踏み込む〉〈落下〉といった異なる動きで移動した、という往復の際の状況を踏まえた上で、なぜ並立関係にある世界間で〈落下〉したのか、また

なぜ「ネネムの伝記」では作品に描かれる世界関係や登場人物の関係は上下関係ではないのか。この二点を「ネネムの伝記」に対する問題提起とし、考察を進めていく。

### 二、ネネムの不自然な〈落下〉の要因

なぜネネムは並立関係にある世界間で〈落下〉したのか。この点を考察するためには、作中に描かれるばけもの世界と、〈落下〉を引き起こしたネネム、この二点について明確に把握する必要がある。

#### 二―一、ばけもの世界について

まず、「ネネムの伝記」に描かれているばけもの世界とは、具体的にはどのような世界なのか注目していく。ネネムの住むばけもの世界の描写を見ていくと、「貝殻でこしらえた外套」、「くらげのやうなばけもの」、「ふか（大型の鯨）やさめ」、「鯨のやうな声」など、ばけもの世界の住人たちの表現に海の生き物が使われており、「ばけものパンが下の方からふらふらのぼって」来る様子は、重力が小さい海の中でパンが下から浮いてくる様子を連想させる。そしてネネムも「昆布取り」を経験したり、ネネムが口笛を吹いた際の「ノット」という言葉が船の速度を表す単位である

ことから、ばけもの世界は海の世界であると考えられる。

しかし、ばけもの世界が海であることは読み取れるが、同時にそれだけでは説明できない不自然な描写もいくつかある。ばけもの大学の「教室の広いことはまるで野原」のようであったり、「大きな崖のくらゐある黒板」を使って授業を行うフウファイバー先生の姿は「せの高さ百尺あまり」ある姿として描かれている。他にも、警察長の名刺が「新聞のくらゐある」大きさなど、ばけもの世界で描かれる登場人物や物の大きさが非常に大きいことがわかる。これらの描写は何を表現しているのか。賢治が生きていた当時の、賢治が実際に目にした海の様子なのか。

それについて考えるために、賢治が「ネネムの伝記」を執筆したと考えられる一九二二（大正一一）年頃やその後で、彼がどのようなことをしていたのか、特に海と関連する出来事があったかという点を見ていく。

一九二一（大正一〇）年二月から一九二六（同一五）年三月までの約四年間、賢治は稗貫農学校（一九二三年に花巻農学校になる）の教諭として働いている。ここでは化学・土壌・肥料・気象・作物・農産製造の科目を担当し、水田稲作の実習も行っていた。賢治が稗貫農学校で教えた科目に関する知識を学んだのは、盛岡高等農林学校に在学

していた一九一五（大正四）年から一九一八（同七）年と、その後、同校の研究生として在籍した一九一八（大正七）年から一九二〇（同九）年までの、約五年間である。学生時代の賢治は地質学を学んでおり、それに対する興味関心は高いものだった。

一九一八年から研究生として活動していた頃の賢治は、自身の先生である関豊太郎教授の研究に携わっていた。関教授は盛岡高等農林学校で物理・気象・地質・鉱物・土壤の科目を担当しており、現在では日本の土壤肥料学の基礎を確立した一人として高く評価される人物だ。賢治を含めた研究生たちは関教授と共同で研究を行い、その研究や調査をまとめた「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」は賢治が研究生を修了した後の一九二二（大正一一）年九月一五日に発行されており、賢治は報告書のうち第一章の執筆担当をしたとされている。では、そこで賢治は何を述べているのか。報告書の第一章には第一節と第二節があり、今回は第二節の中に注目した箇所（波線部で表記）があるため、『新』校本宮澤賢治全集『第一四巻雑纂本文篇（一九九七年四月三〇日 筑摩書房）から引用する。

## 第二節 岩石及地質系統

### 第一項 岩石ノ大別

無生代ノ地層ハ恐ラクハ少クトモ原始地殻ノ一部ヲ代表シ、古生代ハ軟体類甲殻乃至魚類ノ時代ニシテ其下半ニ於テハ羊齒類石松類等カ喬木トナリテ隆盛ヲ極メ其終リニ望ミテ漸ク原始的松柏科ヲ出スニ至レリ、中生代ハ爬虫類及ビ両棲類ノ時代ニシテ巨大ニシテ奇怪ナル形態ヲ具ヘタルモノ多カリキ其終リニ至リテ原始的ノ鳥類ヲ生シ又漸ク現代ノ「カンガル」ニ似タル有袋哺乳獸類ヲ出セリ

(四八頁)

賢治が執筆を担当したとされる報告書の第一章の内容は、地質年代（地球上における生命の進化過程に基づいた地質学上の年代区分）の大まかな流れを説明するものになっている。波線部分で、古生代は海の中に生物が生息し、軟体動物や無脊椎動物が主だったこと、その後の中生代では生物が陸上にも進出し、爬虫類や両生類へと進化し大型化した時代である、という内容を賢治は執筆している。このことから、盛岡農林高等学校の研究生であった賢治は地質学に関する知識を持っていることがわかり、一九二二年頃に賢治が執筆したと考えられる「ネネムの伝記」との関連性を窺うことができる。

前論でネネムの住むばけもの世界は海であることを考察したが、ばけもの世界で描かれる登場人物や物の大きさが

非常に大きいことや、「貝殻でこしらえた外套を着」た甲殻類のようなばけもの紳士、「なめくぢばけものやうな柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをはいて」いる軟体類のようなネネムの姿。これらの描写は、「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」の、「軟体類甲殻乃至魚類」や「爬虫類及ビ両棲類」が生き、それらは「巨大ニシテ奇怪ナル形態ヲ」しているという点と非常に類似している。「ネネムの伝記」を執筆したと考えられる頃の賢治には既に地質学に対する強い関心があり、知識も持っていた。賢治は地質学の知識を「ネネムの伝記」に生かしたということだろう。つまり、ばけもの世界は賢治が見た現在の海ではなく、「古生代・中生代の海」を描いていると言える。

しかし、賢治の地質学への関心や知識のみではばけもの世界の環境や住人などの全てを形作っているとするには不十分だと考える。作中には、中生代の珊瑚木であるばけもの世界の世界長や「貝殻でこしらえた外套を着」た甲殻類のようなばけもの紳士のように、古生物の特徴が強く描かれているばけものたちも登場しているが、作中にザシキワラシが登場したり、ネネムが人間世界に出現した際に「西藏の魔除けの幡」にゾツとする場面も描かれている。ザシキワラシは古生物ではなく日本の精霊的な存在であり、ネネムに関しては、彼の姿は古生物を連想させるが、やはり「西

蔵の魔除けの幡」に反応を示していることから古生物のみをイメージしたわけものとは断定できない。このように、わけもの世界の住人全てが完全には古生物に該当しないのではないかと思われる。そこで、わけもの世界の環境については賢治の地質学の知識を反映した〈海〉、わけもの世界の住人については、古生物の特徴を持った古生物的わけものと人間が信じる精霊や伝承に似通った精霊的わけもの二種類が存在すると考える。

## 二二二、ネネムの正体と〈落下〉の要因

「ネネムの伝記」では、わけもの世界に住むわけものたちが多く登場する。わけものたちには、古生物的わけものと精霊的わけもの二種類があるが、ネネムはどのようなわけものなのか。これまでの考察で、賢治には地質学の知識があり古生代・中生代の生物の特徴が軟体甲殻類の生き物や巨大な植物であったことを知っていたこと、また、ネネムの姿が「なめくぢばけもののような柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをはいて」と軟体甲殻類のような姿であることから、ネネムの姿に関しては古生物の特徴を反映した姿と考察した。しかし、ネネムが人間世界に出現した際に「西蔵の魔除けの幡」や呪文に反応したことからすると、姿は軟体甲殻類の生き物のような姿だが、古生物

をイメージしたわけものだとのみ断定することはできないため、ネネムの本質は姿とは異なるのではないかと考えられる。ここではネネムの本質について、彼が人間世界に出現した場面から考察を深めていく。

ネネムは人間世界に出現した際、「ネパールの国からチベットへ入る峠の頂」に現れるが、賢治がこの場所を設定した要因として、探検家スヴェン・ヘディンによる『トランスヒマラヤ』<sup>5)</sup>(一九〇九年 英語版)という探検記を読んだことが関係している。スヴェン・ヘディンは一九世紀後半〜二〇世紀前半のスウェーデンの地理学者で中央アジア探検家でもあり、一九〇五年にヒマラヤ山脈一帯を調査し、チベット高原とインド大陸との分水嶺をトランスヒマラヤと命名している(現在のカイラス山脈のこと)。『トランスヒマラヤ』には著者がチベットで目にした土地の風土や土着の文化・宗教などが記されており、ネネムが出現した人間世界の描写と似た記述があった。

### 「ネネムの伝記」

ネネムのすぐ前に三本の竿が立つてその上に細長い紐のやうなほる切れが沢山結び付けられ、風にパタパタ、パタパタ鳴つておました。

ネネムはそれを見て思はずぞつとしました。



それこそはたびたび聞いた西藏の魔除けの幡なのでした。  
(三四三頁)

『トランスヒマラヤ』

チャン・ラ峠には石が生まれ、そのうえに供養をしるす旗竿が立ち、ぼろぼろに裂けた旗が、なおも風のなぶるにまかせている。それらの長旗には、いづれもチベット文字で、聖なる六語から成る祈りの句がしるされている。その多彩な色もあせながら、なおも風にはためいているさまは、あたかも祈りの句を駆りたてて、さらに高いちまたにおわす神々のお耳に入れようとしているようだ。  
(上巻 六七頁)

これらの記述から、賢治がネネムの出現場所に関して、『トランスヒマラヤ』の記述を参考したことが考えられる。また、「西藏の魔除けの幡」の説明も記されている。では、ネネムが（落下）を引き起こす前に聴いた巡礼者の呪文はどのようなものなのか。それについても『トランスヒマラヤ』に説明があるため引用する。

（チベット仏教徒やボン教徒は）巡礼の旅によって、あの世ならぬこの世において、祝福を授かりたいから

だ。その祝福こそは、あらゆる悪を、彼らのテントや小屋から追い払ってくれる。（中略）巡礼中、彼らは絶えず（オム・マニ・ペメ・フム）を唱え、

（下巻 一五五頁）

チベット最古の仏教史書の一つたる『マニ・カム・ブム』が狂詩的な誇張をもって述べるところによると、この誓句は、あらゆる幸運を、あらゆる知識の精髓を、また解脱の最大の手段をしめしたものだ。

（下巻 一六一頁）

以上の『トランスヒマラヤ』の引用部分から、ヒマラヤ山脈のチベット仏教地域には魔除けの幡と巡礼者の呪文がどちらも実際にあり、幡と呪文どちらも魔除けとして使われていることがわかった。一方、「ネネムの伝記」でそれらを目の当たりにしたネネムの様子は、「それ（西藏の魔除けの幡）を見て思はずぞつと」し、ネネムを目撃した巡礼者が呪文を唱え出すと「ネネムはまるでからだがいびれて来ました。そしてだんだん気が遠くなってとうとうガーンと気絶してしましました」とある。やはりネネムは単なる古生物ではなく、魔除けの効力に反応する、チベット土着の精霊的存在が本質であると考えられる。つまりネネム

は古生物的身体と精靈的本質を併せ持った特殊なわけのあり、彼の身体と本質、そのどちらも念頭に置いて考察すべきだ。賢治の地質学に関する知識や興味、精靈的存在への関心、その双方の視点がネネムというわけの正体を考える際に必要なのである。

これまでの考察で述べたネネムの正体を踏まえた上で、改めてネネムの不自然な〈落下〉の要因は何だったのかを考えていく。作中で人間世界に姿を現したわけものは複数いるが、ネネムだけが並立関係にある二つの世界間で〈落下〉という不自然な動きをしている。他のわけものたちは「故なくして撞に出現」したとされており、理由も無く自分たちのやりたいままに行動し人間世界に出現した、という事になっていることから、わけものたちは自分の意志で自由に二つの世界を行き来できると考えられる。

同じようにネネムも「足が少し悪い方へそれ」ただけで、人間世界に出現してしまっているが、彼は出現後「あわててバタバタバタバタもがきました。何とかして早くわけもの世界に戻ろうとしたのです。」とあるように、自力では戻れず並立世界間を〈落下〉してしまふ。ここで重要なのはネネムが魔除けの幡に反応を示したことだ。ネネムの身体は古生物だが、彼の本質はチベットに関わりのある精靈

的存在であるため、チベット仏教の魔除けの効力に触れ反応してしまふ。その結果、魔除けの効力によってネネムは強制的に人間世界から祓われてしまふ、わけもの世界と人間世界の並立関係を無視した不自然な〈落下〉を引き起こしたと考えられる。また、ネネム自身が古生物的身体と精靈の本質を併せ持った特殊なわけものであったことも、〈落下〉という不自然な動きになった要因の一つであると言えるだろう。ネネムの落下について考えるには、物語の設定や状況まで広く考察に含めるべきである。

### 三、賢治の意図的な世界構成

本章では先に挙げた疑問点の二つ目、「ネネムの伝記」が他の賢治童話におけるI型作品とは異なる世界構成を持つ理由や背景について考察する。そこには「ネネムの伝記」成立時期の前後における賢治自身の動向が強く関係すると思われる。

#### 三―一、「ネネムの伝記」の焦点

今回の研究では「ネネムの伝記」執筆時期について、賢治の妹トシが亡くなった一九二一年から樺太旅行をした一九二二年夏頃までの期間に成立したとする前掲池上説を

重視している。本作では主人公ネネムが出現罪を犯す場面、つまり、ばけもの世界と人間世界を往来する場面が物語の焦点になっているが、なぜ賢治はそこに物語の焦点を当てたのか。その要因として、人ならざる者と人間世界の接触や交流そのものを描く意図が賢治にあったのではないかと論者は考える。

そこで、作品の中心人物の違いと物語の視点から、もう一度宮沢賢治童話の分析を行った。賢治童話は動植物など本来生き物ではないものを擬人化し、人間以外の様々な登場人物を描いている。前述したばけもの世界でも、古生物であるばけもの世界長や日本の精霊であるザシキワラシも含まれており、ネネム自身も身体は古生物だが彼の本質は精霊的存在であると述べた。これからの分析では、まず各作品における登場人物の違いと物語の視点によって、以下のように分類を行う。これらの宮沢賢治童話の中心人物と物語の視点についての分類を表にし、成立年毎の作品数、ネネムのような不可思議な者（竜神、山男、鬼、天人、ザシキワラシ、風の精霊、土神、雪婆んご）、ばけものなどが登場する作品数も表に加えている。

A：登場人物が人間以外の生き物で、物語が非人間世界の  
ただけで完結する作品。

B：人間と人間以外の生き物がどちらも登場し、互いの接触・交流・認識はあるが、物語の視点は非人間世界側にある作品。

C：人間と人間以外の生き物がどちらも登場し、互いの接触・交流・認知はあるが、物語の視点は人間世界側にある作品。

D：登場人物が人間で、物語が人間世界の中だけで完結する作品。

※：異同のない作品を複数回掲載している場合は初回掲載時のみ数える。

・表中の丸枠で囲った数字は、その成立年に不可思議な者（神魔妖精）が登場する作品が制作されていることを示し、数字はその作品の数を表している。この表では、神魔妖精が登場する作品の成立年が不明であるものは除外する。

・表中には、草稿、清書、改編作と賢治の手入れが入っている作品は含むが、成立時期が全くわかっていない作品については除外する。

・成立時期が推定になっている作品については、一九二一～一九二二年のように推定される成立時期を表記する。

・分類表において、作品の重複はない。  
 (例) 一九二二年と一九二一～一九二三年の作品数は重複していない。

即ち、作品の成立年が明確なものは前者に入れ、後者には含まないものとする。

一九二八年	1	A	0	B	0	C	0	D	1	合計
一九二二年	11	4	8	4	27					
一九二一～一九二二年まで	3	2	2	4	11					
一九二二年	2	3	0	3	8					
一九二二～一九二三年まで	0	1	0	0	1					
一九二三年	0	1	1	0	3					
一九二四～一九二五年	4	3	5	19	31					
一九二五年	1	0	4	5	10					
一九二六年	1	0	1	0	3					

一九二六年まで	0	0	0	1	1
一九二七年	0	0	1	0	1
一九二七年以降	0	0	0	1	1
一九三一年	0	0	0	3	3
一九三一年以降	0	0	1	2	3
一九三二年	0	0	0	1	1

分類表を見ると、一九一九～一九二〇年の執筆作品は見られないが、一九二一年と一九二三年に多くの作品が集中し、その後一九二五年と一九二七～一九三〇年にかけては執筆作品数が少なくなっている。また、登場人物が人間以外の生き物で物語が非人間世界の中だけで完結するA作品は一九二一年に集中し、登場人物が人間で物語が人間世界の中だけで完結するD作品は一九二三年に集中している。「ネネムの伝記」のように不可思議な者(神魔妖精)が登場する作品数はそのほとんどが一九二四年までに執筆され、その後は一九二六年の「ザシキボッコのはなし」以外は執筆されていない。

以上のことから、宮沢賢治童話作品の特徴や流れとし

て、童話創作初期の一九二一年は登場人物や物語の視点が人間以外の存在であり、その後は徐々に減少するが、逆に一九二二年頃には少なかつた登場人物や物語の視点が人間である作品が、一九二三年になると増加する、つまり、賢治が童話に描く登場人物と視点が変化していくことが読み取れる。

不可思議な者（神魔妖精）が登場する作品については、人間と人間以外の生き物が登場し互いの接触・交流・認知が描かれるB・C作品に含まれ、人間と人間以外の生き物が関わらないA・D作品には含まれていなかった。もちろん、不可思議な者（神魔妖精）たちは人間が信じている存在であるから人間との関わりは重要であるためB・C作品に集中したとも考えられるが、賢治は彼らを作中に登場させることで、やはり、人間と不可思議な者（神魔妖精）の接触、人間世界と非人間世界の接触を意図したとも考えることができるのではないか。しかし、不可思議な者（神魔妖精）が登場する作品は一九二四年を境に執筆されなくなっていく。

宮沢賢治童話作品の特徴や流れを見ていくと、賢治の童話創作において一九二一年と一九二三年は登場人物や物語の視点の変化という点において、非常に重要な転換期であるように思える。では、一九二一年と一九二三年の賢治に

何があったのか。賢治の年譜や書簡の内容から迫ろうと考えたが、一九二三（大正一二）年から一九二四（大正一三）年までの二年間分の書簡が残っていないかったため、その期間は書簡の代わりに賢治の詩を扱って考察を進めることとする。

### 三―二、妹トシの死と〈異世界〉

はじめに、一九二一（大正一〇）年の賢治の様子から見ていく。この時の賢治は前年に盛岡高等農林学校の研究生を修了しており、法華宗の仏教団体である国柱会信仰部にも入会していた。一九二〇年から一九二一年における賢治の法華経に対する熱意は非常に大きく、書簡にその熱意を記しているものもある。同時に、実家の質屋を継ぐことを嫌がっていた賢治は、一九二一年一月に家族に無断で東京に家出する。賢治はその後、国柱会理事の高知尾智光と交流し、「賢治は詩歌文学を得意とするというのであるから、その詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようであればならぬ」と言われたことが、『**【新】校本宮澤賢治全集**』第一五巻の年譜に記されており、賢治はこの助言によって「高知尾師ノ奨メニヨリ法華文学ノ創作」へと志していく。同年七月一三日の関徳弥あての手紙（書簡一九五）には、「私は書いたものを売らうと折角してゐます。」と賢治が書

いていることから、童話制作に対する意欲を伺うことができる。その後、同年八月に妹トシの発病を知らせる電報が届き賢治が帰宅した際、「一カ月に三千枚も書いたときには、原稿用紙から字が飛び出して、そこらあたりを飛びまわったもんだ」と弟に話していたことから、一九二一年は童話の執筆活動に意欲的であったことがわかる。

次に、翌一九二二(大正一一)年の状況を見ていく。年譜によると、賢治は一九二一年二月から稗貫農学校の教師として勤めながら、一九二二年一月に『春と修羅』を起稿、童話制作も進めるなど、忙しくも充実した日々を過ごしているように見える。しかし、一九二二年一月、病を患っていた妹トシが亡くなる。その際の賢治の悲しみは大きく、その心境がいくつかの詩に表現されている。

〔松の針〕

一九二二年一月二七日

(前略)

ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ  
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか

わたくしにいっしょに行けどたのんでくれ

泣いてわたくしにさう言つてくれ

(後略)

トシが亡くなる日に書かれた「松の針」からは、妹が死んでしまい自分を置いて「とおくへいつて」しまふ、一緒にいたい、自分に「いっしょに行けどたのんで」ほしいという、兄である賢治の悲しくも強い思いが読み取れる。賢治にとつて妹トシの死はなかなか乗り越えられるものではなく、『新』校本宮澤賢治全集』第一五巻の年譜によると、賢治はトシが亡くなった約半年後、一九二三年七月三日から八月一二日まで樺太旅行へ出かけており、この旅行は亡くなったトシを探し求める傷心旅行であったとされている。以下は、賢治が樺太旅行中に制作した「噴火湾(ノクターン)」、樺太旅行後の「宗教風の恋」の引用である。

〔噴火湾(ノクターン)〕 一九二三年八月二一日

(前略)

まつくらな雲のなかに

とし子がかくされてあるかもしれない

ああ何べん理智が教へても

私のさびしさはなほらない

わたくしの感じないちがつた空間に

いままでここにあつた現象がうつる

それはあんまりさびしいことだ

(そのさびしいものを死といふのだ)

たとへそのちがつたきらびやかな空間で  
とし子がしづかにわらばうと

わたくしのかなしみにいちけた感情は  
どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ

「宗教風の恋」 一九二三年九月一六日

(前略)

どうしておまへはそんな医される筈のなかなしみを  
わざとあかるいそれからとるか

いまはもうさうしてゐるときでない

(中略)

さあなみだをふいてきちんとたて

もうそんな宗教風の恋をしてはいけない

そこはちやうど両方の空間が二重になつてゐるとこで  
おれたちのやうな初心のものに

居られる場処では決してない

これらの詩は全てトシが亡くなった翌一九二三年に書か  
れているが、「噴火湾（ノクターン）」と「宗教風の恋」と  
ではその内容が異なっているように見える。旅行中に書か  
れた「噴火湾（ノクターン）」では、賢治は「どうしても  
どこかにかくされたとし子をおもふ」と述べている。しか

し旅行後に書かれた「宗教風の恋」では、「いまはもうさ  
うしてゐるときでない」「さあなみだをふいてきちんとた  
て」と自分に言い聞かせている。また、亡くなった妹トシ  
が居る場所は「そこはちやうど両方の空間が二重になつて  
ゐるところ」で、「おれたちのやうな初心のものに居られる  
場処では決してない」としている。賢治は樺太旅行をする  
中で、トシを探し求める自分の気持ちに区切りをつけ、亡  
くなったトシの居る場所は自分が「居られる場処では決し  
てない」と理解したのでらう。賢治はその後、妹のことを  
作品で一切歌わなくなる。

### 三―三、試みとしての「ネネムの伝記」

ここまで、一九二二年から一九二三年の賢治について、  
特に妹トシの死を中心に見ることで、賢治の心境が変化し  
ていく過程が読み取れた。賢治はトシが亡くなってから樺  
太旅行までの期間で、亡くなった妹トシは自分とは違う場  
所に居て自分はそのこに行き着くことはできない、という理  
解に至っている。

「ネネムの伝記」を考察する上で論者が注目するのは、  
妹の死を受け入れるまでの賢治の心境の変化についてだ。  
亡くなった妹が居る場所について、次の詩も参照する。

「青森挽歌」 一九二三年八月一日

(前略)

あいつ(妹トシ)はこんなさびしい停車場を  
たつたひとりで通つていつたらうか

どこへ行くともわからないその方向を

どの種類の世界へはひるともしれないそのみちを

たつたひとりであるいて行つたらうか

(中略)

それはおれたちの空間の方向ではかられない

感ぜられない方向を感じようとするときは

だれだつてみんなぐるぐるする(後略)

「青森挽歌」で賢治は、妹トシの居る場所は「おれたちの空間の方向ではかられ」ず「わたくしの感じないちがつた」場所であり、妹は「どの種類の世界へはひるともしれないそのみちをたつたひとりであるいて」行つたと記している。「そのちがつたさびやかな空間」や、「そこはちやうど両方の空間が二重になつてあるとこでおれたちのやうな初心のものに居られる場処では決してない」という先に引用した詩の内容も踏まえると、自分たちの居る世界、人間世界とは異なる世界や空間である(異世界)に亡き妹は居るのではないかと賢治が考え、(異世界)に居る妹との

接触を望んでいたと言える。しかし、賢治は「宗教風の恋」で記しているように(異世界)との接触や交流は不可能だと理解していく。賢治の童話作品を見ても、神魔妖精が登場する作品は一九二四年頃までに執筆され、その後は描かれていない。神魔妖精が登場する作品が一九二四年頃以降に執筆されなかったのは、(異世界)には干渉できないことを樺太旅行後の賢治が理解したからだろう。

ここで一九二二年頃に成立したとされる「ネネムの伝記」に立ち戻つて見る。「ネネムの伝記」は他のI型作品とは違い、ばけもの世界と人間世界を並立関係で描いてあり、ばけものと同人間に上下(優劣)関係がないという特徴がある。なぜ「ネネムの伝記」にはI型作品とは異なる特徴があるのか。また、ネネムが出現罪を犯す場面、ばけもののネネムが二つの世界を移動する行動そのものに物語の焦点が当てられているのはなぜか。

その要因として、ここまで述べてきた賢治の妹トシの死が関係していると考えられる。「ネネムの伝記」に並立関係で成り立つ二つの世界が描いてあるのは、妹トシの死によって賢治が(異世界)の存在を認識したことに基づいているからだろう。本作には、亡き妹が居ると考えた(異世



界」と人間世界の交流や接触を望んだ賢治の心境が反映されており、そのため物語の焦点はネネムがどのようにして罪を償うかではなく、ネネムが出現罪を犯し二つの世界を往来する行動そのものになっていると考えられる。ばけものであるネネムがばけもの世界と人間世界を往来することから、賢治にとって「ネネムの伝記」は、人間世界と「異世界」という二つの世界の交信を試みた作品だったと言えるだろう。

#### 四、おわりに

本論では、「ネネムの伝記」に描かれたネネムが出現罪を犯す場面の状況を踏まえた上で、二つの問題提起を行い、ネネムの不自然な（落下）の要因、「ネネムの伝記」特有の世界構成の要因について考察してきた。賢治にとって「ネネムの伝記」とは、古生物的身体と精霊の本質を合わせ持ったばけものネネムを「異世界」の住人と設定し、人間世界とばけもの世界という二つの世界の往来を試みた作品であり、賢治が求めたものは亡き妹の居る「異世界」との交信だったのだ。しかし、賢治は樺太旅行を通して「異世界」への干渉が不可能であると理解し、「ネネムの伝記」は約一〇年後「グスコープドリの伝記」<sup>10</sup>へと大きく書き換えら

れてしまう。「グスコープドリの伝記」では人間世界のみが描かればけもの世界のような「異世界」はなく、「異世界」や不可思議な者たちとの交流や接触は削除されている。この変化は何を意味するのか。

「ネネムの伝記」成立時期前後の賢治は、法華経に熱意を注ぐ一方で自身の進路に悩み、妹トシの死を簡単には乗り越えられずにいた。この時期の賢治は己の現実しか見えておらず、他者の現実まで考えることができなかった。しかし、「グスコープドリの伝記」成立時期の賢治は、農家の人々の助けになるようにと農作業や肥料の改善や指導を行っており、賢治は自分以外の、他者の現実も見えるようになっていた。一〇年をかけて賢治の視点は自己から他者へと変化し、それに伴い、賢治が目向ける場所が「異世界」から現実である人間世界へと変化した、ということだろう。

では「ネネムの伝記」における、人間世界と「異世界」という二世界での交信の試みは失敗に終わってしまったのだろうか。「ネネムの伝記」から「グスコープドリの伝記」への変遷を考える上で、この点はさらに考察を進める必要がある。その際には、賢治の「異世界」に対する認識の変化も考察の視野に入れることで「ネネムの伝記」だけでなく、「ネネムの伝記」を改編した「グスコープドリの伝記」

や「グスコープドリ」の伝記」、その二作品の舞台であるイ  
ーハトーヴに対する理解を深めることができるだろう。人  
間世界と「異世界」という二世界での交信の試みの成果や  
結果については、論者の今後の研究課題としたい。

## 注

- 1 賢治の二歳下の妹。一八九八(明治三一)〜一九二二(大正  
一一)年。一九一五(大正四)年日本女子大学家政学部予科  
に入学、積善寮に入る。(中略)卒業学年の一九一八(大正七)  
年二月肺炎のため入院、急ぎ上京した賢治の看護を受ける。  
三学期を全休したが、成績優秀により見込点がつけられ卒業が  
認められることとなり翌年三月賢治とともに帰郷。(中略)翌  
一九二二年六月ごろより、過労のため発熱、病臥。八月に入っ  
て咯血、この時信仰上の問題で家を出て上京中の賢治は「トシ  
ビョウキスグカヘレ」の電報を受け、急遽帰宅。(中略)その  
後一年余の療養のいかにもなく、一九二二年一月二十七日結核の  
ため二四歳で死去。この日の衝撃が賢治に、詩「永訣の朝」(松  
の針)〔無声慟哭〕を、あるいはその後多くの挽歌を書かせた。  
賢治にとつてのトシは、単なる妹を超えた精神的存在であった  
といえる。(後略)〔『定本宮澤賢治語彙辞典』原子朗(著)  
二〇一三年八月二〇日 筑摩書房〕
- 2 その様子を示す資料として、『宮沢賢治とその周辺』(川原仁  
左工門(私家版)一九七三年四月)から一つ参照する。

「宮沢賢治君の思い出(二)」出村要三郎(旧姓鶴見)  
埼玉県の秩父へ旅行した時も、宮沢君はあの宏大な太古層、  
中古層などの自然の生因について感動されたことを思い出さ  
れる。(中略)休日には必ずと言つてよいほど岩手山を中心  
に山野を跋涉していた。(六三頁)

- 3 「**【新】**校本宮澤賢治全集」第一四巻の雑纂校異篇(一九九七  
年四月三〇日 筑摩書房)から引用する。以下の報告書の「序  
言」部分は関教授が執筆したものになる。  
「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」

## 序言

其年(大正六年)四月囑託ヲ承ケ之ト同時ニ農學得業士神野  
幾馬及宮沢賢治ノ両氏調査員トシテ囑託セラレ著者(関教授)  
ノ事業ヲ補助スルコト、ナレリ。宮沢氏ハ同年五月以降洽ク  
郡内山野ヲ跋涉シ、拮据勉勵同年ノ終ニ至リテ地質図ヲ完成  
スルニ至レリ、著者ハ自己ノ踏査セル結果ニ照ラシ多少之ニ  
補修ヲ加ヘタリ、宮沢氏ノ觀察ト著者カ美地ニ視察セル事實  
トニ基キ本郡地形及地質ニ関スル記事ヲ編成シ之ヲ報文ノ第  
一章トナセリ。(二八頁)

## 4 瑪瑙木

地下に埋まって珪化された珪化木のうち、材全体が瑪瑙化した  
ものを瑪瑙木と言う。

〔『定本宮澤賢治語彙辞典』原子朗(著)二〇一三年八月二〇  
日 筑摩書房〕

- 5 本論での「トランスヒマラヤ」の引用は、『スヴェン・ヘデ  
イン探検記四 トランスヒマラヤ(上・下)』(スヴェン・ヘデ

イン(著) 青木秀男(訳) 一九八八年二月二〇日 白水社  
から引用する。

原著はスウェーデン語で書かれており(『Transhimalaya, Upprä-  
klar och äfventyr i Tibet, 3 delar』一九〇九年)その後、独  
訳(『Franchinaraja, Entdeckungen und Abenteuer in Tibet, 3 Bde』  
一九〇九年)・英訳(『Franchinaraja, Discoveries and Adventure  
in Tibet, 3 vols』一九一〇年)に翻訳された。賢治は英訳本を  
読んだとされている。賢治がこの書籍を読んでいたのは確実で、  
詩『装景手記』の下書稿にあたる詩「(一)造園家とその助手  
との対話」に記されている。『定本宮澤賢治語彙辞典』 原子  
朗(著) 二〇一三年八月二〇日 筑摩書房)

詩「(一)造園家とその助手との対話」中には「Trans-Hi-  
maraya の高原の／住民たちが／考へる」(『Sve』n Hedins の名与  
ある／著述のなかに)とあり、この部分から賢治が『トランス  
ヒマラヤ』を読んだことがわかる。

(詩の引用は『新』校本宮沢賢治全集』第一三巻(下) ノート・  
メモ本文篇 一九九七年十一月一〇日 筑摩書房)

6 一九二〇～一九二一年における賢治の法華経に関する書  
簡(『新』校本宮沢賢治 全集』第十五巻 書簡本文篇

一九九五年二月二五日 筑摩書房)

一九二〇年(大正九) 二月二日 保阪嘉内あて 封書(封  
筒ナシ)

(前略) 今度私は／国柱会信仰部に入会致しました。即ち最  
早私の身命は／日蓮聖人の御物です。従って今や私は／田中  
智学先生の御命令の中に丈あるのです。

(中略)

日蓮聖人は妙法蓮華経の法体であらせられ／田中先生は少  
なくとも四十年來日蓮聖人と心の上でお離れになった事がな  
いのです。／これは決して間違ひではありません。即ち／田  
中先生に 妙法が実にはっきり働いてゐるのを私は感じ私は  
仰ぎ私は嘆じ 今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対  
に服従致します。(後略)

一九二二(大正一〇)年一月中旬 保阪嘉内あて 封書(封  
筒ナシ)

(前略)(心の中に魔王が現れた時は)

まづは心は兎にもあれ／甲斐の国駒井村のある路に立ち／  
数人或は数十人の群の中に／正しく掌を合せ十度高声に／南  
無妙法蓮華経／と唱へる事です。

(中略)

保阪さんどうか早く／大聖人御門下になって下さい。／一諸  
に一諸にこの聖業に従ふ事を許され様ではありませんか。哀  
れな衆生を救はうで／はありませんか。(後略)

7 賢治が家業の質屋を継ぐことを望まない旨の書簡(『新』  
校本宮沢賢治全集』第十五巻 書簡本文篇 一九九五年二月  
二五日 筑摩書房)

一九一八(大正七)年八月 保阪嘉内あて 封書(封筒ナシ)

(前略) 私は長男の居ながら家を持つて行くのが嫌で又その  
才能がないのです。それで今私は父に、どうかこれから私を  
家が雇つて月給の十円も呉れる様な様式(形式ではない、本

統に合名会社にもして仕事をするつもりです。ことに鉱業的なこと、又工業原料的なこと)にして呉れまいかと頼んでみます。

8 「高知尾師ノ奨メニヨリ法華文学ノ創作」

賢治の「雨ニモマケズ手帳」の一三五頁に記されたメモ(『新校本宮澤賢治全集』第一三卷(上) 覚書・手帳本文篇 一九九五年二月二十五日 筑摩書房)

◎高知尾師ノ奨メニヨリ

法華文学ノ創作

名ヲアラハ(ネ)サズ、ノ報ヲウケズ、ノ頁高ノ心ヲ離レ、

9 『兄のトランク』(宮沢清六(著)、二〇一六年五月一〇日、筑摩書房)

著者宮沢清六は賢治の末弟であり、この初刊は一九八七年九月二十九日に筑摩書房より刊行されている。

10 「グスコープドリの伝記」

一九三二(大正一一)年頃に成立したとされる「ネネムの伝記」の原稿の一部は賢治が手を加え、一九三一(昭和六)年に「グスコープドリの伝記」に改編したと考えられている。その後さらに改編を行い、一九三二(昭和七)年三月一〇日に「グスコープドリの伝記」を『児童文学』第二冊で発表している。

11 グスコープドリの伝記」成立時期の賢治について

「ネネムの伝記」を執筆して約一〇年後、賢治は農業に関する取り組みを精力的に行っていた。その際の様子を、『新』校本宮澤賢治全集』第一六卷(下)の年譜篇から参照しまとめた

ものを掲載する。

一九二七(昭和二)年

七月中旬 盛岡測候所で記録を調べ予報を聞き、特に指導した農家に対し天候不順の対策を講じる。

一九二八(昭和三)年

三月一五日 この日より一週間、石鳥谷町南端の塚の根肥料相談所で、肥料設計を行う。

同八日 (稲作挿話(未定稿))

七月～九月 早天が続く、稲は稲熱病が発生し、予防と駆除のため奔走する。

一二月 寒さのため風邪をひき、急性肺炎となる。自宅療養。

一九三〇(昭和五)年

四月四日 沢里武治あて 封書(封筒ナシ)

こんどはけれども半人前しかない百姓でもありませんから、思ひきって新しい方面へ活路を拓きたいと思ひます。(中略)もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいばかり考へます。『新』校本宮澤賢治全集』

第一五卷 書簡本文篇 一九九五年十二月二十五日 筑摩書房)

一九三一(昭和六)年

一月一五日 東北砕石工場技師となる。

三月四日 石灰岩抹の岩手県内の推奨を得るため、盛岡に行き、県肥料督励官村井光吉技師・平井重吉技師、県農事試験場の工藤藤一技手を訪ねた。

七月一八日 湯本村方面の稲作状況を視察。稲の生育不良のため説明に骨を折る。

二〇日 『岩手日報』夕刊三面に「花巻地方稲作状況（七、一五現在）」の記事が出る。賢治の資料提供と推定される。

九月 上京後、病臥

この年、冷害と豪雨により凶作。

この年に「グスコンブドリの伝記」を執筆か。

一九三二（昭和七）年

三月一〇日 『児童文学』第二冊に「グスコンブドリの伝記」を発表。